

東方・裏幻想郷 2章
「裏幻想郷」

遠藤 瑠理栞

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

祠をみつけた権は・・・

目次

第1話	1
東方・裏幻想郷 3章 「裏幻想郷の主」	9
漆黒の館	14
「新たな力」	21

第1話

「こんなところに裏狂門があったなんて！」

そう思って、椀は祠の中へ入っていった。

祠の中は暗く、あたりにはいくつもの魔法陣が描かれていた。

そして、中央には、一つの台座があった。

「これは……」

そうつぶやきながら、椀は台座に手を触れた。その時だった。

「っ……!!!」

あたりを囲んでいた魔法陣が紫色に光り、台座からは眩い光が放たれてい

た。

なかった。

その光に椀は一瞬にして包み込まれ、その光が消えたとき、そこに椀の姿は

「……!!」

(声?)

「……おい!」

(誰だ?)

「おい!お前、だいじょうぶか!」

「……!自分は確か……。」

(……思い出せない。あの時自分は台座に手をかざして……)

「おい!大丈夫かって聞いてんだよ!」

「!」

「何驚いた顔してんだ!驚いたのはこっちの方だわ!」

「……。」

「たまたま通りかかったから……な?……そのく……あれだ……えつとく……」

「会って早々悪いけど、……ここは?」

「あく……ここは裏幻想郷って場所だ。」

(裏幻想郷!?!本当なのか?)

「裏幻想郷って……?」

家に来いよ。

「そんなことより．．．な？　こんなカビくせえところで話すより．．．い．．

．．．な？．．．そ、そつちの方がいいだろ!？」

「あ、うん、そうしてもらえらなら。」

「そんじゃ、いこせ！」

権とまだ名前も知らない誰かは歩き始めた。

「よおし！そろそろつくぞ！」

「やけに人里に似たところだね、ここは。」

「まあ、似てるつつうか、人里だったんだがな。」

「そう．．．なのか．．．？」

「まあ気にすんな！昔のことだ！　お、着いたぞ！ここだ！」

権は、案内されてついた建物に入った。

「ここは．．．？」

「ここはな、図書館だ！あつちに座敷があるから、そこで話そうか！」
権は、図書館の奥にあった座敷に座った。

だ！

「そんで、まずは自己紹介からだな、えつとく、俺は、狂木小鈴ってゆうもん

お前は？」

「椀です。」

椀は、細々と答えた。

「おい、元氣無い奴だな！しょうがねえ、茶でも入れてきてやるよ！

ちよつと待ってろよ！」

「あ、ありがとうございます……。」

そうして、小鈴は、隣の部屋へ行つた。

しばらくして、

「すまん、待たせたな！」

こうして出てきたのは、茶色のお茶。

「このお茶、茶色くないですか？」

「ん？なんだ？嫌だったか？」

「いや、なんでなんだろうな〜って。」

「このお茶は、裏幻想郷の超絶ポピュラーな、茶だぜ！」

えつとく、確か名前は……、あ！そうだ！それは狂玄茶だ！

体にいいらしいぜ！飲んでみろ！」

「ああ、うん。」

「なあ、お前さ、表の世界から来たろ（ド直球）。」

「!!」

「あ、ちよい、落ち着けて！」

「ほっ。」

「それで、どうやってこの裏幻想郷へ？」

「・・・それがあんまり覚えてなくて。」

「そこを何とか！」

「えくつとく、祠？みたいなのがあって・・・。」

「祠!・・・、もしかしてそれは、裏狂門ってやつだったか？」

「そうだったと思う。」

「そうか!・・・、じゃあ、その中に台座は・・・」

「はっ！ 思い出した！自分は、台座に手を触れて・・・！」

「まあ、事情はわかったぜ。迷いこんだつてとらえていいんだよな？ すごい

うの。」

「多分、いいと思うよ。」

「OK。それじゃあ、裏幻想郷について知つといたほうがいいと思うぜ！」

「まあ、せっかくだし、ね？」

「そうと決まれば移動だ！移動！」

「い、移動!？」

「と言つても、隣だが。それか、呼んでくるか？」

「そうしていただくとうれしいですね。」

「お、おう。じゃあちよつと待つてろよ！」

そう言つて、小鈴は出て行つた。

そしてすぐに帰つてきて、

「呼んだんだがな、連れてこいとき。だからどちらにせよ移動だ！」

／＼（ \wedge o \wedge ）＼ナンテコツタイ」

権は、ゆっくり立ち上がった。

「あ、イテテテ、足がしびれた。」

「あれれれ。」

「ありや？もう収まった。」

「はやいなおい！」

権たちは隣の家へ向かった。

(カラーン)

「お邪魔するぜ。」

「あら。いらつしやい。」

「ついさつき会ったばかりだぜ。」

「それもそうね。 あら？そちらの方は…？」

「こいつが例の奴だぜ。」

「あらまあ！ そうなの！…それじゃ、ちよつとこちらへ…。」

椀は、綺麗で華やかな着物を着た少女の前に座った。

「まずは名前からね。 あなたは？」

「私は椀です。」

「そう。 私は稗田亜狂。 名前の(狂)の文字の読みは、(キヨウ) じゃなくて

(キユウ)、

そこまで覚えておいてね。」

「はい。 わかりました。」

「あそこにいる、(小鈴) って人もたまに間違えるんだから、ぶぶ〜w」

「うわ！ 腹立つ奴だなお前は！」

「…さてと、では、本題に入ろうかしら。」

？」

「はい。わか r……………」

ドカアアアン！

突然の爆音。

「まったく、こんな大事な時になんの用なの!？」

「困った奴だけ。お?んく、そうだな、権!折角だから会ってみたらどうだ

「あ、はい、そうしてみます。」

「もう!大事な時に来るんじゃないわよ!」

ドカツ!

骨でも砕けたかのような鈍い音。

「イテテテて…、わかったよ。」

そこにいたのは、一人の蝙蝠の翼をもった、少女だった。

東方・裏幻想郷 3章 「裏幻想郷の主」

「……えーつと、まずは亜狂に。大事な時に来てすまなかつた。そして……。」

少女は、柩の方へ向いた。

「もみじ……、だったか？」

「はい……、あつてます。」

「おう、分かった。」

少女はコクコクとうなずいた。

「私の名は裏レミリア・スカーレット。」

「……ん？」

裏レミリアさんの下に何かいる？

柩は、話を聞きながら気になっていた。

「……この裏幻想郷の……。」

(☒……)

何かが下りる音？

「ん？」

権は、ある事に気づいてしまった。

裏レミリアのパ○ツが膝あたりまで来ていることに。

そして、また動きだした。

(☒~~~~~)

(サツ！)

あ！パ○ツが取れた！

「よし！取れた！今夜のおかずはこれ

だ！」

後ろの影が、なんか言ってる……。

その時、権はその影と目が合った。

「は?!しまった!見られた!聞かれた！」

「……ん?なんかスースーする……。」

裏レミリアもさすがに気付いた様子だ。

(さわさわ……)

(ぶにつ!)

「あ／／／パ、パ○ツがない！」

レミリアはすぐに後ろを向いた。

「あくもう！またあんななの！？これで何回目なのよ！」

「ああ…怒ってるお姉様もgood…。」

「あんなたつて奴はー…。」

バシッ！

「はあ／＼／＼最・高♡」

バタッ

レミリアは少女をつまみ上げた。

「来たからには、自己紹介ぐらいしなさい！」

「金髪ひんぬくのロリサキュバス！裏幻想郷のトップアイドル的な存在！裏フラン

だよー！

ヨ・ロ・シ・ク・ね♡」

「よ、よろしく願います。」

「ちよ!?なんで引き気味なのよー！むー！フラン、怒っちゃうぞー！」

「フラン！あんなが怒ったら、世界が破滅するわよ！」

「Oh…罵・倒♡」

バタ…

「フラーーン!!!」

「大丈夫かな、これ。」

「多分だけど、大丈夫ではないわね。」

「いや、100%そうだけ。」

「・・・結局、裏レミリアさんは、裏幻想郷の主なんですよね?」

「おう!そうだけ。」

「まあ、いろいろあつてな・・・」

小鈴の顔がけわしくなる。

「話は、本人から聞いたほうがいいぜ。重い話だが・・・な。」

「わかりました・・・。」

「まあ、今は無理そうだから、お茶でも飲むか!」

そう言つて小鈴は亜狂に急須を渡す。

「あら? 私につくれと? それも急須だけ・・・で?」

亜狂の周りにまがまがしいオーラが見える。

「ひい!いい、今持つてきまゝす!!」

小鈴は走つて出て行つた。

「たまには、脅しも大切ね★」

「そう・・・ですかね？」

権は、裏がありそうだと感じた。

「はあはあ、とつてきたぜ」

「あら、遅かったわね。おかげで喉がカラカラだわ。お詫びにあなたが作って頂戴。」

「え〜！まじかよ・・・。」

「さあさあ！文句言わないの！」

小鈴はしゅしゅ作り始めた。

漆黒の館

椛は、裏レミイを呼んだ。

「・・・少し話したいことがあるんですけど・・・。」

裏レミイはうなずいて、

「わかった。じゃあ場所を変えるか。」

「どこに行くんですか？」

椛は聞いた。

「私の館だ。」

椛たちは、歩き出した。

・・・そのころ・・・

「チツ、裏世界に表のやつが迷い込んだな。」

「どうするかね。」

「まあ、ぶつ放せば済むことだろ！」

「……、しかもあの主が館に招いたということは……。」

「また、戦争かもしれないなあ。」

「戦争なら、受けて立つぜ？」

「お前は引つ込んでいろ。」

「わかったよ。」

「とにかく、あの表のやつは戦争の種になってしまう！」

「なので、暗殺部隊を送り込む。賛否は？」

「了解した。」

「別にいいよ。」

「よし、決定だ。」

「では、会議をやめとする。以上、解散！」

「「おうー！」」

椀たちは館についた。

「少しまってろ。」

裏レミイは言った。

「はい。わかりました。」

椀は返事をした。

「なあ、なんか変な感じがしねえか？」

小鈴が言った。

「そうですね、何かに見られてるような……。」

亜狂も言った。

「！」

「そこですー！」

亜狂は落ちていた石を拾って投げた。

すると……

石が空中で止まり、黒い煙が出てきた。

「よくここがわかったな。」

煙の中から声が聞こえる。

「誰だー！」

亜狂は怒鳴った。

「名乗る名はない。」

煙がどんどん薄くなつていく。

「なんでだ！ 言え！」

亜狂はまた怒鳴った。

「生きのいいやつだ、決めた、まずはお前からだ。」

煙が消え去った。

そこにいたのは、全身が黒く、白いどくろのような仮面をしていて、

右手は包帯でぐるぐるまきになっている謎の男だった。

「お前からだ？ 生意気な！」

亜狂は、だいぶおこっているようだ。

「特別に見せてやろう。」

そういうと、男は包帯を外した。

中から、オレンジ色をした長い腕が出てきた。

「なんだ・・・、それ・・・」

強がついていた亜狂が、その腕を見た瞬間座り込んだ。

「ふん、この世界のやつはこんなものなのか。」

そういいながら、男は近づいてくる。

「やめろ。くるな！」

亜狂は叫ぶ。

しかし、その手はもう亜狂の胸にあてられていた。

「ひい!?!」

亜狂は聞いたこともないくらい高い声で声を出した。

「宝具・ザバー・ニーヤ」

(グチャあああああああああああ!)

破裂したような音があたりに響く。

「亜狂ー！ー！ー！ー！！！！」

小鈴は叫んだ。その時。

「解体するよ?」

後ろで声が聞こえた。

「なんだ・・・?」

小鈴は振り返った。

その先には、小さい少女が、ダガーをもって切りかかってきていた。

「おわ!?!」

小鈴は素早くかわした。

「あーあ、よけられちゃった。せつかく殺そうと思ったのに、ざんねーん。」

少女は、詰まんないような顔をしていった。

「そんなことより、亜狂はどうなった!?!」

小鈴は、あたりを見回す。

そんな小鈴の前に例の男が現れた。

「これを見ろ。これがなんだかわかるか?」

男は右手を開いた。

「これは!?!」

それは、亜狂の心臓だった。

「ちゃんとみている。これがどうなるかを。」

男は右手を閉じていく。

「や、やめろー!」

小鈴は止めようとする。

「ふんー!」

ぐしゃあああああああああ．．．

「あああああああつあああつあああああ!!」

遠くで亜狂の悲鳴が聞こえた。

「そんな・・・、亜狂が・・・。」

小鈴は座り込んだ。

「そんなになさしまなくてもいいよ？」

背後で声があった。あの少女だった。

「あなたも一緒だから、ね？」

少女はダガーを構える。

「え？」

小鈴は何のことかわからなかった。

「今から、あなたを解体するからね？あの人とは、お空の上で楽しく暮らしなよ？」

それじゃあ・・・さようなら。」

ジャキイイイイイン！

「アあああああああ!!!」

悲鳴が響く。

それを、権は見ていたしかなかった。それと同時にあることに気づいた。

次殺されるのは私だ、と。

「新たな力」

私は殺される。こんなよくわからない世界で。

私は殺される。もうどうでもいい。早く死んでしまおう。

私は……

あきらめかけたその時、頭のなかで声が聞こえた。

（おーい、あれ、おーい、聞こえるか、おーい！返事、返事しろー！）

誰？しかも新頭のなかに直接？……返事はしとくか。

もみじは返事をした。

（ああ、よかった。まだ生きてるな。なんかお前の『ああもう死んじやえセンサー』が反応したから怖かったぜ）

もみじは思わず笑ってしまった。

（で、そつちはどういう状況だ？）

この言葉でもみじは今の状況を思い出した。そして声の主に伝えた。

（なるほど、殺されかけていると……てことは、人がいるのか……よし！体貸せ！ソイツらを倒す!!）

もみじは戸惑った。体を知らない人に貸せと言われたからだ。しかし

そのとき、もみじの意識は遠退いていった。

「さあ、死ぬ覚悟はできたか？」

男はもみじに問い詰めた。

「ああ、いつでもいい。覚悟はできている。」

もみじは答えた。

「ふん、小癩な。」

男は鼻で笑った。そして短剣をとりだした。

「では死んでもらう。」

そうやって男はものすごいスピードで襲いかかってきた。

「所詮は人間、この私に勝てるわけがないのだよ。」

短剣は、もみじの胸に刺さっていた。

「人間？勝てるわけじゃない？なにいつてんだ？いいか？俺は人間じゃない。そして、『勝てるわけがないのだよ』はこっちのセリフだ。」

そう言ってもみじは、胸の短剣を抜いた。

「何っ!?!生きてるだど!?!おかしい。なぜだ?」

「なぜか? 答えは簡単、あんたが俺より弱いからだ。」

そう言ってもみじは男に短剣の刃先を首に当てる。

「お前は、何者なんだ? さっきのもみじとやらとは違うようだが。」

男は問う。

「最後に教えてやろう。俺の名は、虚狐亞だ。」

そう言つて虚狐亞は男の首をはねた。

「ふう、疲れた。そろそろ返すか。」

虚狐亞は、もみじを心の中で呼んだ。

(もみじく、かえつてこく! 終わったぞ)

(?! 終わった? 何が?)

もみじがかえつてきた。

(なにしてあの男をぶちのめしたんだけど。)

(ええ!?! 本当!?! すごいなあ)

(じゃあ、お前戻すから、さよなら)

(えええ!?! ちよつと待つてよ、名前は?)

（俺の名は虚狐亞だ。もう一度だけ言ってやる、ここあ、だ。俺はお前の裏の部分だ。裏もみじ的な感じだ。じゃ。）

（私の、裏……）

「うーん……あれ、ここは？」

目を覚ますと、もみじはベッドの上にいた。

「お、起きたかもみじ、大丈夫か？」

隣には裏レミイが座っていた。

「大丈夫ですけど……なんで私はベッドの上に？」

「お前が倒れてたんだよ、扉の前で。それを私が運んできた。」

「あ、それはどうもです……」

「そういうえば、さつきフランがこの部屋からでていったけど大丈夫？」

「え？そういうえばなんかすごいスースーするような……」

もみじは恐る恐る下半身の方に手を伸ばす。そして触ってみると……

（くちゅっ）

「はう／＼／＼パンツがないです！返して〜！フランちゃんーん！！」

もみじはノーパンで走り出した。